

白藍塾オリジナル

2025年度 入試小論文分析&解答のヒント

2025年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

● 慶応・法学部

慶応・法学部は昨年度出題形式をがらりと変えてきたが、今年度はさらに大きく形式が変更された。課題文がなくなって、法と正義に関するローマ法の3つの学説（いずれも短文）を示した上で、「法律の適用は正義の尊重と両立可能であるか」について論じることが求められている。

試験時間の短縮に伴っての変更と考えられるが、とまどった受験生も多いだろう。ただ、「法と正義の関係」というテーマ自体は法学部の王道と言えるもので、小論文の勉強をしっかりとやってきた受験生にとっては決して難しくはないはずだ。

「両方の立場からそれぞれ普遍的な例を論拠として示しつつ～」とあるが、書き方としては基本的な4部構成を使って、第2部で反対の立場の論拠を紹介するようにすると、うまくまとまるだろう。

3つの学説をどう踏まえればよいかはわかりにくいだが、2つ目の学説に従えば、「各人に各人の権利を分配するという『正義』を、他人を害しないという条件の下に保障するのが『法律』である」と定義できるので、その定義を前提にすると考えやすい。

ただし、「両立させるべきかどうか」ではなく、「両立可能かどうか」が問われている点に注意が必要だ。「両立できる」という立場の場合は、「確かに、両立できない場合もある。しかし、原則としては両立できる」といった論じ方ができる。

一方、「両立できない」という立場の場合は、「確かに、理念としては両立できる（または、両立できる場合もある）。しかし、実態としては、両立は不可能だ」といった論じ方ができるだろう。

先ほどの定義を踏まえれば、正義（権利の衡平な分配）を実現させるのが法律ということになるので、理念としては正義と法律は両立するはずだし、実際に法律の適用によって正義が守られた例はいくらでもあるだろう。だが、「公共の福祉」を名目に、法によって個人の権利が制限されることも多い。また、権利と権利が衝突して法律で調整された場合、権利を認められなかった側にとっては「正義」が尊重されていないことになってしまう。

そのように、例そのものは適切なものをいろいろと考えられるだろう。

「両立できる／できない」のどちらの立場でもかまわない。法と正義の関係について、自分なりにしっかりと考えられていれば、十分説得力のある内容になるはずだ。

* 執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複製することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://hakuranjuku.co.jp>